

ウルク・ワールド・システム

—アナトリアの場合—

三宅 裕

The Uruk World System :
A Review from Anatolia

Yutaka MIYAKE

G. アルガゼが、「ウルク・ワールド・システム」という概念を提出するにあたって、アナトリアが果たした役割は非常に大きかったといえることができる。アナトリアでは、ユーフラテス河に次々とダムが建設され、それに伴う緊急調査によってウルク併行期の資料が着実に蓄積されてきた。氏のウルク研究の原点でもあったクルバン・ホユック (Kurban Höyük) もこうした一連の調査のひとつであり (Algaze et al. 1990)、またカルケミシュ・ダムやビレジック・ダムの水没地域の踏査にも主導的な立場で取り組んできた (Algaze et al. 1991)。これらの資料が、その著書や論文の中でも大いに活用されているからである (Algaze 1993)。このところ新しい資料が出てこない南メソポタミアを尻目に、アナトリアは今やウルク研究の舞台の主演となりつつある。こうした「ドーナツ化現象」ともいえる状況は現在も進行中で、ハジュネビ (Hacinebi) やシャラガ・ホユック (Şaraga Höyük) など、アナトリア側の新資料は次々と明らかになっている。

アルガゼの功績は、蓄積の進んできたウルク期の資料を体系的に整理し、「ウルク・エクспанション」という現象をもとにウルク世界の全体像を描いてみせたことであろう。そしてその結論は、南メソポタミアを中心とする「ワールド・システム」として機能していたというものであった。

アルガゼが実際におこなったのは、セトルメント・パターンの分析であった。ウルク的な要素の認められる遺跡が、ユーフラテス河中流域に出現するようになるのは、ウルク中期併行期になってからのことであるが、この場合ウルク的な要素とは、特徴的な土器をはじめとして、建築・粘土板文書・印影・護符などのことである。こうした遺跡を南メソポタミアとの関連が深い「ウルク的」集落として認定し、在地の集落と峻別した上で、その規模や内容に基づいて「格付け」をおこなっている。その結果、一定の領域の中心となる都市的な集落 (enclave)、それとつながりの深い衛星的な集落 (cluster site)、主要交易路上にある中継地 (station) という3つの類型に区分された。またアナトリアでは実例が挙げられていないが、中心的集落にくらべると規模の小さい出先機関的集落 (outpost) というものも設定されている。

ある一定のまとまりを持った領域は、ユーフラテス河

域に関しては3つほど設定されており、下流からハブーバ・カビーラ南/テル・カンナス (Tell Qannas) など、カルケミシュ周辺、そしてサムサットがそれぞれの領域の中心的集落であったとみなされている。カルケミシュ周辺では、カルケミシュ、ティラディルテペ (Tiladir Tepe)、クム・オジャウ (Kum Ocagi)、シャディ・テペ (Şadi Tepe) が中心的集落の候補として挙げられ、これに付随するものとして衛星集落18遺跡、中継地3遺跡が認定されている。サムサットを中心とする領域では、衛星集落6遺跡とハッセク・ホユックを含む中継地6遺跡が認定されている。中心的な都市を頂点とする階層化された集落構造のもと、一定の領域が南メソポタミアのコントロール下におかれ、銅などの金属・木材・石材等アナトリアの資源を獲得し、南メソポタミアへ搬出すべく機能していたというのである。そして、アルスランテペやテペジク (Tepecik) など東アナトリアの遺跡でもウルク系の土器などが認められるのは、南メソポタミア主導型の交易がさかんにおこなわれていたことの証左であるとした。

ここでまず問題となるのが、各遺跡についての評価である。ハブーバ・カビーラ南/テル・カンナスを都市の様相を備えた中心的集落とみなすことはよいとしても、ほとんど発掘の進んでいないカルケミシュ周辺の遺跡やサムサットが、果たしてこれに比肩しうるほどのものであったかどうかについては、確証が得られていない。特にサムサットは既に水没してしまっており、それを確かめる術さえ失われている。ハブーバ・カビーラのようにほとんど何もないうちに計画的に都市が建設されているのであれば、そこに南メソポタミアの主導的な力を認めることは可能かもしれない。しかし、サムサットは、ウルク併行期だけでなくそれ以前から長い居住の歴史を有していることが知られている。またカルケミシュ周辺についても同様のことが言えそうである。ハブーバ・カビーラ/テル・カンナスのイメージが強烈すぎて、その残像をアナトリアにも見てしまったといっただけでは言い過ぎであろうか。

さらに中心的集落に付随するという衛星的な集落についても、その認定の仕方には根拠の不明確なものも多く、どの程度実態を反映しているものなのか疑問が残る。多くの場合ウルク系土器の出土ないしは採集を根拠としているよ

うであるが、それだけでは無理があると言わなければならない。アルガゼ自身も触れていることとはいえ、「銅石器時代後期 (Late Chalcolithic)」とはなほ曖昧な表現で言及される在地の社会との関係は、厳密に検討していかなくてはならない問題である。実際、ハジュネビでは在地の伝統を継承する集落の一面にウルクのコミュニティーが形成されていたと主張されている (Stein 1999)。そこからは、在地社会との協調という在り方は見えても、南メソポタミアの優位性という「ワールド・システム」の姿は、読みとることができない。

またここでもうひとつ確認しておきたいことは、東アナトリアにおいてメソポタミア的要素が認められるのは、なにもウルク併行期が初めてのことでないことである。ハラフ・ウバイド併行期にもメソポタミア的要素は、彩文土器という形で東アナトリアに浸透していた。ただし、「暗色磨研土器」と呼ばれる在地系の土器が主体的であり、ハラフ・ウバイド土器は量的にわずかししか検出されていない(最大でも5%程度)。こうした状況に大きな変化がみられるようになるのは、次の銅石器時代後期である。この時期には「暗色磨研土器」がほとんど姿を消し、スサの混和される明色系の土器が突如として主体的になる。こうした土器は、固有の名称を持っていないせいもあり注目されないが、アムークF期の“Chaff-faced Ware”、テル・ハマム・アル・トゥルクマン (Tell Hammam et-Turkman) V期やテペ・ガウラ (Tepe Gawra) 出土の土器に内容的に近いものである。在地の伝統とは異なる系統の土器が主体的になるという意味において、東アナトリアはこの時期に大きな画期を迎えたと評価することができる。またこの土器の分布は、イランのウルミア湖周辺まで広がることが確認されており、広域に及ぶ文化圏が形成された可能性が考えられる。さらにその土器の様相には専業の強化・大量生産化という姿も垣間見ることができ、またこの時期には銅生産も盛んになっている。良好な発掘資料が少なく社会構造など

に具体的にどのような変化があったのかまだ解明されていないが、都市化へ向けた胎動が、北メソポタミアからアナトリアにかけての地域でも独自に始まっていたことも想像できる。時期的にはウルク前期に併行するものと考えられ、「ウルク・エクспанション」が、まだアナトリアに及ぶ前の段階のことである。

このように「ウルク・エクспанション」は、決して無人の野に広がっていったものではなく、また社会組織や様々な技術の面で南メソポタミア世界に大きく遅れをとっていた地域に広がっていったものでもない。それ以前の段階で北メソポタミアからアナトリアを網羅する交易ネットワークが確立されていた可能性は十分考えられる。南メソポタミア世界は、既存のネットワークに協調的に関りながら、様々な物資を調達していったのではないだろうか。「ワールド・システム」という響きのいいことばに引きずられることなく、在地の社会との関係を跡付けながら、その実態を探っていく必要がある。

参考文献

- Algaze, G., M.E. Evins, M.L. Ingraham, L. Marfoe and K.A. Yener 1990 *Town and Country in Southeastern Anatolia, Vol. 2: The Stratigraphic Sequence at Kurban Höyük*. Oriental Institute Publications 110. Chicago, Oriental Institute.
- Algaze, G., R. Breuninger, C. Lightfoot and M. Rosenberg 1991 The Tigris-Euphrates Archaeological Reconnaissance Project: A Preliminary Report on the 1989-1990 Seasons. *Anatolica* 17: 175-240.
- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System: The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization*. Chicago and London, University of Chicago Press.
- Stein, G.J. 1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. Tucson, University of Arizona Press.
- Stein, G.J. et al. 2000 *Paléorient* 25/1, The Uruk Expansion: Northern Perspectives from Hacinebi, Hassek Höyük and Gawra.

東京家政学院大学
Tokyo Kaseigakuin University